砂坂　深雪
SUNASAKA Miyuki

豚

段ボール紙、金網

豚

本作は、段ボール紙で家畜動物である豚をモチーフに、それぞれ成長過程や大きさが異なる五頭の個体が群れで過ごしている姿を表した。ブタは品種改良された種のこともあり、野生化するとイノシシに先祖返りするなどして野生個体がほぼ存在しなく、また、成長過程が大きく異なる個体は同じ空間で飼育しないため、これは実在しない情景である。
食は、生活において必要不可欠な行為である。食肉文化を否定する考えは全く持っていないし肉は普通に食べるが、ふと生活の中で気になる瞬間がある。例えば、焼き肉店の看 板に牛のキャラクターが楽しそうに描かれていると、少し気になる。加工肉のパッケージに載っているキャラクターがかわいくデフォルメされた豚なのも、気になる。こういった違和感を皆それぞれが抱いているはずだが、わざわざ口に出して訴えかけることはしない。わたしもそのうちのひとりであるし、そういう自分を悪いとも思っていない。だが、わたしはこの違和感を生活の中で覚える瞬間が多く可哀想とは異なる、この負の気持ちを自分の外側に向けて、負の感情の発生源である豚の形を借りて表現したいと思った。
段ボール紙という素材は、自身の手で再生できる素材である。入手も自分の生活に近いところでできる。心材はなるべく軽くなるものを選ぶため、金網を用いることが多いが、中は空洞のため、外にどんどん紙材を盛って徐々に形を出していく工程を繰り返す。段ボール紙を粉々に砕いて、紙漉き枠に流し込んで段ボール再生紙にして、粘土状にした紙や平面の紙を重ねていくことで造形していく行為は、まるで自分で生んで育てて大きく成長させているかのような感覚を覚える。段ボール紙を用いた過去の制作物をまた新しい制作に、素材に戻してまた違う形で生まれ変わらせることを繰り返す。こうして生まれた私の動物たちは、消費ではなく再生のサイクルをつくることができるのだ。今後も、私は私の手で生み出し 再生を繰り返していきたい。